

藤原作弥

聖母病院の友人たち

— 肝炎患者の学んだこと —

新潮文庫



せいぼびょういん ゆうじん
 聖母病院の友人たち
 — 肝炎患者の学んだこと —

新潮文庫

ふ-17-1



昭和六十一年五月十五日印
 昭和六十一年五月二十五日発行

著者 藤原 弥作

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
 東京都新宿区矢来町七一
 電話 業務部(〇三)二六六―五一一
 編集部(〇三)二六六―五四〇
 振替 東京四一八〇八番
 定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛へ送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Sakuya Fujiwara 1982 Printed in Japan

新 潮 文 庫

聖母病院の友人たち

——肝炎患者の学んだこと——

藤 原 作 弥 著

新 潮 社 版

3600

目

次

厄年の曲り角	一〇
黄色い人	三六
下落風景	三〇
幽霊の散歩	九〇
われら肝民族に幸あれ	一九
尼僧物語	一四八
脱病院遁走計画	一七五
白衣の妖精たち	二〇六

陽気な三人姉妹……………二三四

小羊は憂鬱……………二六

二つの退院通路……………二六七

*

聖母病院五十周年式典……………三四

——あとがきにかえて

解説 水野肇

聖母病院の友人たち



挿絵 藤原優子



厄年の曲り角

一昨年から昨年にかけてわが家は疫病神に取り憑かれた、としか言いようがない。まず妻が倒れ、四カ月間入院した。一時は危篤に陥りながらも回復し無事退院、二カ月間の自宅療養でようやく完治——と一家四人が胸を撫でおろす間もなく、今度は私が入院する破目に陥った。

正確に言えば妻は昭和五十五年七月から入院し十月に退院、十二月まで自宅で安静療養し、翌五十六年一月から職場に復帰した。その妻とまるでバトンタッチするかのようには、五十五年十二月から半年以上、五十六年六月中旬まで病院生活を送ったのである。つまり、私たち夫婦は交代で、合計ほぼ一年間、病院にとじ込められた長期療養を余儀なくされたわけで、一時、わが藤原家はあわや崩壊、とまで思われた。

その事実だけでも平凡なサラリーマン家庭にとつては、まさに歴史的な事件だったが、厄年期の二人が同じ時期に患った病気が同じ「肝炎」、入院した病院も病棟も同じ場所なら、主治医、看護婦たちも同じ人々、という奇妙な一致。そうした不思議な暗合の共通体験に私たちは、科学では説明できない因縁のようなものを感じたりした。

もっとも同じ屋根の下に住む夫婦だから、病気が一方から他方へ伝染した、とは容易に想像される。実際、「婦唱夫随の琴瑟相和した鴛鴦夫婦」と、友人たちはからかったものであ

る。まして妻が襲われたのは、流行伝染性のA型ウイルス肝炎。この病気は経口伝染だそう
で、事実、夫婦の情愛が濃密であることが感染の直接原因となることもある。だが、私の場
合は同じ肝炎でも実は脂肪肝から徐々に進行した慢性肝炎疑だった。主治医の杉本医師も
「奥さんの肝炎が御亭主に感染したものではない」と断言した。これは照れかくしの弁解で
はなく、純然たる医学的な検査・診察の結論である。

しかし、私たち夫婦、そして家族が久し振りに連帯と団結の絆で結ばれたのは、やはり肝
炎が仲立ちであった。「同病相憐れむ」が改めて夫婦、家族の絆を強固なものとした。

妻が入院中に、主治医の杉本医師が、家族の既往症を含む健康状態を総点検してくれた際、
私の慢性肝炎疑を発見してくれたのが私の入院のきっかけである。発見、というより再発見、
と言った方が正確だろう。私はかつて、勤務先の通信社から米国に派遣された。特派員生活
に疲労困憊して帰国した昭和四十六年、五年振りの健康診断で脂肪肝的症狀が発見され、二
カ月ばかり病院通いしたことがある。日銀の金融記者クラブに詰めていた関係で、日銀医務
室の山口医長の診断を受けたところ東大病院を紹介され、二カ月の通院で完治したが、その
後も、多忙な新聞記者生活の合間を縫って検査を受け、自らの健康管理には怠りなかったつ
もりである。

だが、妻が劇症の急性肝炎で、わが家の近くの聖母病院にかつぎ込まれ、入院と自宅療養
を続けていた半年間、仕事と家事と看護で私の心身が疲弊しきった間隙を衝いて、肝臓に巣
喰っていた肝炎がいつの間にか大きな鎌首をもたげていたのである。

肝炎の原因や病状は医学書や解説書に譲るが、夫婦で入院してみて、いかに肝臓疾患が猖獗をきわめているかを知り、驚いた。現在、日本には肝炎や肝硬変を含め何らかの肝臓病で悩んでいる人は、約三百万人といわれる。四十人に一人。潜在患者五百万人という推計もある。また、近年は「アルコールと肝障害」の関係が重視されているが、かりに日本人の五千万人が酒を嗜むとすれば、その十人に一人は肝炎患者、その半数が酒好きとすれば、飲み助の五人に一人が肝臓を患っていることになる。「二十一世紀の国民病」という命名も故なしとしない。

その肝臓の重要性を指摘して警鐘を乱打してもし過ぎることはないのだが、そうした医学上の問題はさておき、私たち夫婦が療養生活を通じて得たもつとも貴重な収穫は、聖母病院という小さなコミュニティとそこで働く人々の存在を知ったことである。妻は三十九歳、私は四十三歳という共に厄年年齢圏で同じ病魔に冒されたこと自体が、それぞれの人生の節目における個人的体験としてだけではなく、夫婦の歴史、家族の歴史にとつても大きなエポックを劃した事件だった。だが、それ以上に、あの聖母病院と、そこに働くシスター（修道女）、医師、看護婦、職員、そして一緒に闘病生活を送ったさまざまな患者たち——つまり「聖母病院の友人たち」との人間愛に満ちた心の交流は一生忘れられない。

いまどき「心」とか「人間愛」などと言えば、偽善めいた綺麗ごとの印象を与えがちで面映ゆい。ましてキリスト教系病院という舞台設定であれば、宗教的プロパガンダ臭をも伴な

いがちである。しかし、宗教には無縁の平均的な俗人が、現代世相から忘れられていた人間同士の心の通いをそこに見出し、印象を要約すれば、どうしてもそう表現せざるを得ない。生き馬の目を抜く取材競争の喧噪けんそうの巷ちまたからある日突然、静謐せいひつの病室に身を横たえることになり、以後六カ月余り、生れて初めての長期療養生活を送った中年初期の私は、最初こそその環境の激変に当惑したが、〃聖母病院の友人たち〃の生き方を観察しながら自分をも見つめるうちに、次第に心の平安を見出し、いったのである。

その聖母病院に私はピクニックに行くようないでたちで入院した。ボストンバッグにパジャマ、下着、洗面用具など必需品一式と本二、三冊をほうり込み、登山帽子をかぶってわが家に別れを告げた。まさに小旅行に出かける気軽な気分だったので、まさか六カ月以上も入院するとは夢にも考えていなかった。

私の住んでいる新宿・上落合しもがらあひのマンションの前の大通りをそのまま北に約十分、道なりに進すすむと、西武新宿線下落合駅しもがらあひを過ぎたあたりから道の左手に聖母病院の広大な敷地が開けはじめる。そこは行政区劃の上では新宿区中落合。道路をへだて聖母女子短期大学やその学生寮のある右側が下落合である。

この辺一帯は昭和の初めまで東京府豊多摩郡落合町といわれ、高台の丘陵地は雑木林や草原で、ところどころに農家の藁葺わらふき屋根が見えるだけだった。なだらかな丘は四季の変化に富

み、目白通りの街道筋には、思い出したように商店が点在し、その前を牛車がのんびりと往き交っていた、という。

大正から昭和にかけて画家や彫刻家がこののどかな環境にアトリエを建て、「文化村」が形成されたが、それでも聖母病院一帯は谷あいの雑木林で、泉が湧き、池をつくり、当時は洗い場と呼ばれていた。その落合町は、幾つかの変遷を経て現在では東京都新宿区の下落合、中落合、西落合、上落合、の四つの町にわかれる——ということを私がよく知っているのは、前の年に横浜・鶴見から引越してきたばかりで、不動産屋の宣伝文句をまだ覚えていたからである。

西武新宿線と平行して流れている妙正寺川は下落合駅を過ぎて神田川と合流し、お茶の水方面に迂回しているが、その合流点付近の土地が最も低い。昔、聖母病院下の谷の水が注いだ地点だろう。随所に、水位が増すと洪水の危険があることを告げる警報告知板が掲げられている。

そこから緩やかな勾配で、切り通しのような病院の敷地の土手が続いており、荷物を下げて歩くとかかなり疲れる。登り切った所が病院の入口だった。振り返ると、下落合駅や私のマンションのあるごみごみした上落合・小滝橋の住宅街が下の方に見渡せた。その上には新宿副都心のノッポビル群が聳えていた。

内科病棟に入るとナース・ステーション（看護婦室）から婦長や看護婦たちが出てきた。婦

長のシスターは枝は旧知の間柄だ。妻が危篤に陥った時、私と一晚寝ずに看護してくれた。妻とは同年配の筈だが、小柄で、頭から白いベールを被^{かぶ}っていて白衣の中の顔がいつそう小さく感じられるせいかな、まだ二十代にしか見えない。

「あなたたち御夫婦って、本当に仲が良いのね。奥様が肝炎なら旦那様も肝炎」とシスターは枝は私のカルテを整理しながらからかうように言った。ナース・ステーションの向いの一号病室は女性用二人部屋で、つい最近まで妻が長らく入院していた場所である。懐しそうに覗^{のぞ}き込むと「奥様がお休みになっていたベッドに寝ていただくわけにはいきません」と、たしなめられた。

内科病棟の各病室は、入口が廊下に面し、窓側は中庭が一望に見渡せるつくりになっている。二号室（女性用六人部屋）、三号室（男性用六人部屋）、五号室（同）と並び、各部屋の前の廊下をはさんでナース・ステーションに隣接しているのは第一処置室、第二処置室、第三処置室、男女トイレ、リネン室、配膳室など。リネン室から廊下は左手に折れて六、七、八号の一人用個室が三室だけ並び、突き当りが一〇号室（女性用六人部屋）だ。日本の病院の習慣で、「死」と「苦」を敬遠し四号室と九号室は欠番。したがって内科病棟のベッド数は二十九である。

私の病室は三号室と決められた。六人部屋だ。ベッドは入口から右手にABC、左手にFEDとアルファベット順に記号がふられ、私のベッドはD。つまり窓際である。カルテには一〇三Dと記入された。一階病棟三号室D、私の呼称は「囚人一〇三D号」というわけだ。